

第四十八回予科練戦没者慰霊祭式辞

今年も満開の桜が、平和な日本全国に、春を謳歌しました。

本日「公益財団法人海原会」第四十八回予科練戦没者慰霊祭を開催致します。

ご来賓、ご遺族、会員の皆様、ご参列賜わり、また関係します皆様方のご支援、ご協力のお陰を戴き、祭典が挙式されます。

主催者を代表し、衷心より有り難く、御礼申し上げます。



春夏秋冬、幾歳月が流れても私達予科練出身者一同「大正、昭和」の激動時代に生まれ、常に心中「強く甦る」生か死、厳しく歴史に残る体験の日々がありました。

当時海軍首脳は、昭和五年、十六才前後の「航空機搭乗員」制度を確立、時代に応じた少年達みずから求めて志願、毎年の募集に参加、一意専心ひたすら身を鍛え技能を磨き、奮闘努力名実ともに立派な海軍飛行兵の中堅に育ちました。

彼らは祖国存亡の秋、国を案じる一筋白雲棚引く大海原に、従容として後を頼むぞ、の「一声」航空母艦や、航空基地から堂々と怒濤の如く出撃、第一線部隊に配属されました。

同窓の七十%(一万八千五百六十四名)の御柱は敢然と死地に赴き、若い人生の総てを捧げました。

仏教の訓(俱会一処)此の世で死するは別々でも、つぎの世界でまた一処、青春の熱き思いで語りあかさん。

今彼等は、いづこの海深く、大空高く在りしか。父母兄弟を偲び爽やかな笑顔、我々の想いに生き続けております。

戦後も早や七十年を過ぎ、それぞれの立場が違っても、筆舌に絶して戦った友の「勲」を胸中に馳せ、慰霊・顕彰が私達の心に残り、星移り変わり行くとも、国に尽くす貴さに差異はなく、純情愛国「予科練魂」は

永遠に継続され、次代を背負う青少年に伝承する事を、期するものであります。

先輩、後輩「ガツチリ」肩を組み、二人像碑前に粹然として追悼の誠、果たすを誓いました。

願わくば、在天の英霊遙かを見据え、鞭撻、激励され、日本の限り無き「発展」を、



乞い願うものです。

ご参列賜わりました皆様、真意にて感謝の御礼申し上げます。ご挨拶の辞と致します。

平成四十七年五月二十四日

公益財団法人海原会

理事長

堺

周一

